CAGE－籠の中の記憶探偵－

白城海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＡＧＥ－籠の中の記憶探偵－

【Ｎコード】
Ｎ９０２３Ｙ

【作者名】
白城海

【あらすじ】
「人が――死んでる？」
ある日学校で死体を発見してしまう主人公、天海慶次。
震える彼に向かい、幼馴染の風間祈衣は宣言する。
「高校生探偵の出番ね！」
主人公にベタボレの中二病の後輩。毒を吐くけど兄思いの妹。自称

高校生探偵の幼馴染。変態でブラコンの兄。
そんな奴らとのドタバタの日常に紛れ込んできた《非日常》

死体発見の日から相次ぐ闇討ち。話を聞いてくれない警察。そして、
巻き込まれ傷ついた後輩。
何故彼は狙われるのか。

そのカギは――彼の《記憶障害》の中にあった。

第一話　俺と死体と女子高生探偵

■　［六月四日。十六時三十分。　私立平坂高校　音楽室］

唐突だが聞いてほしい。

『音楽室の扉を開いたら人が死んでいた』。

目の前の出来事に俺――天海慶次は心の奥底から恐怖し、絶句していた。

六月初旬とは思えないほどの暑さ。

吐きそうなほどの熱気。

体中に張り付く湿気。

普段なら地球に向かって文句の一つも言ってやりたい程の不快指数。

体の至る所から汗が噴き出すのを感じる。冷たい汗。恐怖からの汗。

手が震え、寒気が全身を覆う。

まずは目を疑い、次に正気を疑った。百人が百人とも俺と同じく無様な姿を晒すはずだ。

「夢だ。夢に違いない」

ゆっくりと目を閉じ、そして開く。

目に映るのは天井から延びたロープ。そしてだらしなく垂れ下がった男の四肢。

もちろん床に足を着いていない。首の骨が折れているのだろうか、死体は奇妙な角度で首を垂れ、上目づかいとも言えるような顔を俺の方に向けていた。

コイツは夢じゃない。間違いなく現実だ。

死体と目が合う。今にも眼窩（がんか）からはみ出しそうに飛び出た、それでいて暗く光の無い瞳。

すぐにでも逃げ出したいのに床に張りついたかのように足が動かない。

すぐにでも目を逸らしたいのにまるで自分が死体になってしまったかのように首が動かない。

このまま死体に魂を引きずられ俺も死んでしまうのではないだろうか。混乱が妄想を呼び、妄想が錯乱を引き出し、意識が遠くなる。

――その時だった。

「どうしたの、ケージ？」

聞きなれた女の声が引き金となり、ようやく俺の体が硬直から解き放たれた。ただし抜け出せたのは首だけだったが。

後ろを振り返ると見慣れた女の顔。《風間祈衣》だ。

小顔で化粧気が薄く、色白で整った顔立ち。快活さを象徴するかのようにぴんと外側に跳ねたミディアムロングの癖っ毛。猫を思わせるやや釣り上った大きな瞳。その瞳が俺の顔をじっと覗き込んでいた。

「人が……死んでるんだよ」

教室の死体を指差し、伝える。手が震えているのが自分でも分かった。

俺が指を向けた方向を風間が見る。一瞬、目を見開き絶句。常識的な反応だ。

だが、彼女が続けた言葉は常識的とは正反対のものだった。

「困ったわね。このままじゃ練習できないわ」

「そう言う問題か！？」

思わず叫ぶ。変わり者だと言う事には気付いていたがここまでとは思わなかった。

「冗談冗談。分かってるわよ。高校生探偵の出番って言いたいんでしょ？」

風間が現実離れした奇妙な発言をする。

高校生探偵。

風間祈衣と言う女はミステリやサスペンスものが大好きで、ことあるごとに探偵を自称している。

事実、校内の出来事に限って言えば定期テストの順位から同級生の三角関係の内部事情まで完璧に把握しているらしい。俺に言わせ

れば探偵と言うよりはワイドショーだが。

「あたしのカンが言ってるの。この事件は殺人の可能性があるって」

とんでもない発言だった。それも真顔で、真剣に。俺の瞳を真っ直ぐに見据えて。

風間は思いつきをそのままノリと勢いで口に出す女だが、今回ばかりは冗談ではなさそうだった。

「可能性って事は、自殺じゃないかもって事か？」

「そう、これは音楽部創立以来の天才ボーカリストであり、高校生探偵であるあたしの出番に違いないわ。推理漫画の王道よ」

首吊り死体を指差し、風間が嬉しそうに声を弾ませた。

「はぁ、仕方ないな。期待してやるよ。お前の実力って奴に」

「任せて！あたしの歌で世界を変えてみせるわ！アタシの歌を聞けぇっ！」

「そっちは欠片も期待して無ぇよバカ！探偵の方だ、探偵の方！」

思い付きをそのまま口に出しただけだった。コイツは俺の想像を裏切る事が趣味なのか。

「仕方ないわねー。じゃあ、まずさしあたってする事、それは」

風間がおもむろにポケットから携帯電話を取り出し、キーを操作する。現場を画像に残すつもりなのだろうか。

慎重な操作。そばで見ている俺にでさえ緊張感が伝わってくる。

一体何をするのだろうか。

長いようで短い時間。
俺の視線を気にしてかせずか、風間はおもむろに携帯電話を耳にあてた。

「あ、もしもし。警察ですか？高校に死体があるんですけど…はい、場所は――」
「通報かよ！？高校生探偵はどこに行った！常識すぎて予想外だよチクショウ！」
「市民の義務じゃない。何を言ってんの？」
「探偵だったら推理しろ！」
「警察に任せた方が確実だし？通報は趣味みたいなものだし」

ウサ美ちゃんかお前は。

「それに、別に推理しなくても死ぬわけでもないし」
「いっそ死ねよ」
「それに、電話中なんだから邪魔しないでよ。警察の人困ってるじゃない」
「俺のせいか！？俺のせいなのか！？」
理不尽だ。あまりにも理不尽だ。

「……ったく。いつもいつもバカみたいなことばかり言いやがって。少しは俺のストレスをだな」
「でもさ」
ぶつぶつと呟く俺の愚痴を、通報を終えた風間が遮った。
「震え、止まったわよね？」
にこり、と俺を瞳を覗きこみ微笑む風間。

そう、彼女の言った通り、いつの間にか俺の体の震えは収まっていた。

「はぁ」と嘆息し諸手を挙げての降参する俺。

そんな俺を見て、妙に勝ち誇った顔が癇に障ったのでとりあえず「死ね」と罵倒しておいた。

第一話　俺と死体と女子高生探偵（2）

「警察が来るまで少し時間がかかるみたいよ」

携帯電話を閉じた風間が俺に向かい言った。声色には怯えも動揺も感じられない。つくづく大物だと思う。でなければ突き抜けた馬鹿だ。

「警察が来る前にやることがあるの」

「やること？」

確かにそうだ。職員室に教師を呼びに行かないといけない。それに、野次馬が来ないように見張りも必要だろう。いくら人通りの少ない放課後の音楽室と言えど、誰も通らないとは言い難い。

「意外と考えてるんだな。で、お前は何からするんだ？」

「もちろん死体の観察よ！殺人事件なんて初めてだからよく見ておかなくちゃ」

「お前が野次馬かよっ！死者を冒涜しやがって！」

「そんなつもりは無いわよ！」

怒鳴る俺。怒鳴り返す風間。冒涜するつもりはないと言いつつ携帯電話のカメラで写真を撮っているのは何故だ。

「完全に興味本位の野次馬じゃねぇか…」

頭を抱える俺をよそに、風間はひたすらに死体を観察し写真を撮り続けていた。

職員室に行こうとも思ったが、今の風間の姿を誰かに見られたらとてつもなく面倒な事になりそうなので見張りをする事に決める。

殺人の共犯者か俺は。

「本当にこんなヤツが俺の幼馴染なのか…？」

昔の俺に友人は選べと説教してやりたい気持ちになり深く嘆息。

すると今まで無言で死体を調べていた風間が口を開いた。

「見た所、自殺かな。服の乱れが無い。気になるのは衣類に付着した白い粉、かなぁ」

「白い粉？」

「うん。何だろ、校舎の外壁の破片かしら」

「何でそんなモンが服につくんだよ」

ちらり、と一瞬だけ死体の方を見る。六月の暑さの中、何故か死体は長袖を着ていた。彼はどうして夏服を着なかったのだろうか。

「それを調べるのが警察の仕事じゃない。何言ってるの？」

「やかましいわ！この口だけ名探偵」

「口だけって。人の夢を馬鹿にするなんて最低ね」

「俺が最低ならお前は人間のクズだよ！死んで死体に詫びろ馬鹿っ！」

天井から垂れた物体を指差し、怒鳴る。見慣れない顔。何年生だろうか。

「ところで、こいつは誰なんだろうな？」

顔の広い風間なら知っているかもしれない。素直に疑問を口に出す。すると風間は目を見開き、

「ケージったら、《忘れ》たの？隣のクラス、Ａ組の梶原君よ。梶原正明（わらまさあき）」

呆れたような顔で言った。隣のクラス？聞き覚えが無いぞ。

「まさか？Ａ組との体育は合同だ。それなのに顔も名前も思い出せない？そんな馬鹿な事」

ありえない。普通に考えればありえるわけが無い。

だが、俺は《普通》じゃない。思い当たるフシがあるのだ。

汗が再び体中を覆う。

同級生、それも隣のクラスの生徒を見て顔も名前も出てこない。

そんな《異常》が、俺にはありえるのだ。

混乱し、目を白黒させる俺に構わず風間が言葉を続ける。

それは、余りにも衝撃的な言葉。常識外れの言葉。

「それどころか、あたしとケージは梶原君の話をしたわよ？今日、昼休みに」

「え？」

今度は……何を《忘れ》たん……だ？

トドメのように放たれた彼女の言葉に俺は目の前の死体の事も忘れ、呆然と立ち尽くすしかなかった。

――――――――――――――――――――――――

■［六月四日　午後九時三十分　天海家］

警察の事情聴取は思っていたよりあっさりしたものだった。
ドラマで見たような《第一発見者が犯人扱い》などと言う事もなく穏やかに終える事が出来た。
梶原正明を《忘れ》ている事も、風間や担任が《事情》を説明してくれたため問題にはならなかった。

「それでは、また署に来てもらう事になると思いますので」
「分かりました」

私服警官の言葉に頷き、覆面パトカーから降りる。風間とは警察署前で別れた。
網島駅（あみしまえき）から徒歩十分。二階建ての白い一軒家。それが俺の家だ。
リビングに明かりが灯っている。両親とは連絡が取れなかったので、家に居るのは妹だろう。

「ただいま」
「おかえりなさい。遅かったですね」

リビングに入った瞬間、キッチンでお茶を淹れていた妹の美鳥（みどり）が満面の笑顔で振りかえった。

ほっそりとしたシルエット。背中まで伸びたさらさらで瑞々しい黒髪。
時には小学生にも間違われるほどの童顔。
大きな瞳に長い睫毛をぱちぱちとさせ家族の帰宅に喜ぶ姿はまる

で小動物の様。
顔つきと雰囲気のせいか、年齢にそぐわないクマのキャラクターで揃えられたエプロンとスリッパがが妙に似合っている。
この様子を見てこいつが一応高校生。俺と同じ学校の一年生だと言っても誰も信じないだろう。

「ちょっと色々あって」
「色々？」

二人分の冷茶をトレーに載せ、テーブルへ向かう妹が疑問の声を上げた。
「ちょっと警察署に行っててさ。無茶苦茶疲れたんだよ。聞いてなかったか？」

鞄を床に放り投げ、椅子に腰かけ、そのままダイニングテーブルに突っ伏す。自室に荷物を置いて制服（ブレザー）から着替える気力は残っていなかった。

「…って、あれ？」

美鳥からの返事が無い。
不審に思い、伏せていた顔を上げる。
目の前には彫像のように微動だにしない姉がトレーを持ったまま固まっていた。

――がしゃん。

直後、ガラスが砕ける派手な音が室内に響いた。
トレーに載せていたグラスが滑り落ちたのだ。慌てて椅子から立ち上がり駆け寄る。
「どうした！大丈夫か？」
飛び散ったグラスの破片を確認する。グラスは描かれていたキャラクター――ミッキーマウス――の原型を残さない程に無残に飛び散っていた。幸いにも彼女に怪我はなさそうだ。
だが、様子がおかしい。美鳥は床に崩れ落ち、青ざめた表情で小刻みに震えていた。
「兄さん…」
「どうしたんだ急に。具合でも悪いのか？」
倒れこもうとする美鳥を慌てて抱きとめる。床にはグラスの破片が散らばり危険極まりない。
呼吸を調べる。怯えるような荒い呼吸。心に不安がよぎる。
だが、次の瞬間に妹が放った言葉は予想外にも程があるものだった。
「…自首しましょう。私が一緒に付いていきますから」
心配して損した。
「何でだよ！？警察から帰ってきたって言ったのに、どうしてソコから自首になるんだ！」
「逃げてきたんですね。大丈夫です。例え兄さんが最低の犯罪者だ

ったとしても私だけは兄さんの味方ですから」
「問答無用で犯罪者扱いしてる時点で味方もクソも無いだろうがっ」
「そ、そんなに怒るって事は――」

ようやく納得してくれたのか、涙を止め顔を上げる美鳥。どうやら誤解は解けたようだ。

「――本当に何か悪い事をしたんですね。人間は図星を突かれると怒るって聞きますし」
「どうしてそうなるんだァァァァ！！」

結局、美鳥の誤解を解き終えるまでに、俺は十分以上の時間を費やす事になったのだった。

――――――――――――――――――――

「に、兄さんは何もしていないんですか？」
リビングのソファーに並んで説得すること約１０分。
ようやく美鳥が俺の話を信じてくれた。

「当たり前だろ」
「《忘れ》てるだけじゃなくて？」

真顔で見つめ、尋ねる美鳥。
ずきり、と胸が痛む。
《忘れる》。胸に刺さるその言葉を無理矢理に振り払い、笑顔を作り答える。

「いくら俺の物忘れがヒドくても、それが原因で警察沙汰なんてありえないだろ？」

常識でモノを考えてほしい。

たかだか物忘れで警察沙汰なんて起きるわけ――

「先週、母さんが兄さんの身柄を警察署に引き取りに行きましたけど？」

「覚えてないな」

本当は覚えてるけどな。

だが、そんな嘘は美鳥に通じるはずもなく…

「その顔は覚えてますよね！またケンカですか？」

一瞬で見透かされてしまった。さすが家族と言うべきなのだろうか。

「また…ってお前。俺が年がら年中ケンカしてるみたいな物言いは止めろよ」

「それはそうですけど…。やっぱり心配ですよ」

顔を伏せ、今にも泣き出しそうな表情になる美鳥。

心配なのは俺の身の事だろうか。

それとも、俺の《障害》の事だろうか。だが、どちらにせよ

「慣れるしかないだろ。どうしようもないんだから」

諭すように良い、頭を撫でる。そう、慣れるしかないのだ。

「うぅ、そうですけど…。でも、ケンカじゃないならどうして警察

に？」
目元をぬぐいながら美鳥が俺に問いかける。
「あぁ、それは人が死ん――」
「自首しましょう」

何でだよ。

「だから真顔は止めろっ！せめて全部言わせろ…ってオイ！電話を取り出すな！１１０番通謀しようとするな！お前は風間か！？」
携帯電話を取り出した美鳥の腕を体ごと抑え込む。
顔が近い。お互いの息遣いが届く距離だ。
携帯電話を奪い取り、距離を取る。妙に意識してしまった。

「だって、兄さんがとうとう人を殺すだなんて」
「殺してない！自殺だ…と思う」

自信は無い。だが、警官の話では恐らく自殺ではないかとのことだった。
もちろん、警官の言葉が俺達を安心させるための《優しいウソ》と言う可能性もあるのだが。

「本当に、本当に、ですか？」
「本当だ。俺は無関係だ」

じっと、見つめ合う。
美鳥は少しだけ想像力が豊かすぎる少女だ。
その為、色々とすぐに誤解してしまう性格だがそれも全て俺の事

を心配しての事だろう。

５秒…１０秒。

長いようで短い沈黙の後、ようやく美鳥が口を開いた。

「…自分で殺したのを《忘れ》ただけだったりして」

おい。

「お前酷過ぎない？」

「兄さんの妹ですから」

「何も言い返せない」

前言撤回。

コイツは俺を心配しているんじゃなくて、多分俺で遊んでいる。

「だから話を聞けっての！」

近所迷惑も考えず、渾身の叫び声を上げる俺。

美鳥に全ての事情を説明し終えたのは、さらに２０分の時間を必要としたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9023y/

CAGE－籠の中の記憶探偵－

2011年11月27日02時59分発行